

図書館の深海魚

植田 郁子

エレベーターが地下二階に到着し、ドアが開くと、そこは真っ暗闇だった。

ギョッとしたが、普段は節電の為に消灯されていることを思い出した私は、エレベーターから出るとすぐに扉横のスイッチを入れた。

パッと電気が付くと、一瞬にして目の前に夥しい数の本が現れた。間違いなく、ここは書庫だ。この図書館で働く者しか入れない、閉架書庫である。静まり返ったその場所は、まさしく「シーン」という表現がぴったり当てはまる。手にしていた小さなゼムクリップを床に落とした時、本当に「ポトリ」と音が聞こえたのには驚いた。

この閉架書庫はまさしく「本の海」だった。勿論、地上の開架書庫にもここかしこに無数の本が並べられているが、辺りを歩く人間の空気の動きや息吹がある。貸出手続きをするカウンターには、やり取りの聲がして、それなりの賑わいも感じられる。

しかし、地下にひっそりと存在するこの閉架書庫は、まるで深海の如き静けさを保っていた。学生から持ってきてほしいと依頼された本を、背表紙の記号・番号を頼りにウロウロと探し回る私は、まるで深海に迷い込んだ一匹の魚のよう――。

それが初めてこの図書館の閉架書庫に入った時の、私の印象だった。

それは今から二十三年前に遡る。

一年契約の派遣社員ではあったが、三十七歳で待望の図書館司書の仕事に就けた私は、胸を躍らせて仕事を始めた。

私が派遣された先は、マンモス大学の附属図書館。学生数が多いだけあって、図書館の広大さといったら目を見張るほど。蔵書数は軽く百万冊を超えている。地上三階、地下二階の立派な建物で、当時は地下全体が閉架書庫として使用されていた。

派遣されたメンバーは私を含めて女性ばかり十名。年齢が一番上だというだけの理由で、私がリーダーを任された。自分を待ち受けていた難題など予想もできなかった私は、軽い気持ちでその役目を引き受けたのだった。

ところが仕事が始まって間もなく、私は我儘な一人の同僚に悩まされ始めた。彼女は新卒だったので未熟なのは致し方なかったが、かなり両親に甘やかされていると見え、私達のお給料ではとても買えない高価なブランド品でいつも身を固めていた。

「仕事中に私語ばかりしていたらあかんよ」と注意をしても、どこ吹く風。「図書館の中ではバタバタと足音を立てて走らんように」とたしなめれば、ふくれっ面を返される。

私は（やれやれ、このお嬢さんにはこの先も世話を焼かされそうやわ）と、その時には暗澹たる思いがしていたのだった。

図書館に配属されている大学の職員にも、細やかな気配りが必要だった。というのは、職員が出す評価が良ければ我々の契約を更新してもらえる可能性があったからだ。

若い同僚達と職員達の双方に神経を使うとなると、これは結構大変だと、事の重大さに気付き始めた頃、私は自分に向けられた、もう一群の冷ややかな視線を感じ取った。

それは図書館でアルバイトをしている、この大学の学生達の視線だった。彼らは派遣社員が入った為に人数を半分に減らされたのだ。つまり私達は、彼らの仲間から仕事を奪った“憎きライバル”だったのである。

同僚、職員、学生。この三集団のスタッフと折り合いをつけていくのかと気が重くなったが、なんの、私はまだ甘かった。派遣元の、我々の担当者を忘れていたではないか。私達が“ボス”と呼ぶ、その四十代半ばの女性はしばしば図書館を訪れて我々の仕事ぶりを見て回ったが、ボスや職員が出す厳しい注意は私が同僚に伝えることになっていた。

私は職員とボスの命令には従わざるを得ず、時として同僚や学生からは反発を食らって突き上げられるという、真にきつい立場に置かれていた。会社ではないものの、いわば“中間管理職の悲哀”ともいうべき心境を初めて味わうことになったのだ。

司書の仕事自体も自分史上初だというのに、人間関係の難しさが重なって、私の神経は時間が経つにつれてどんどん疲弊していった。追い詰められた私は夜もろくに眠れず、真剣に辞職すべきかと考えた。自分もまた、まだまだ経験不足の未熟者であったのだ。

だが、そんな私にも一か所だけ、救いの場があった。それは、貴重書や古くて傷みやすい書籍等が収められた、スタッフ以外は立ち入ることのできない地下の閉架書庫である。

初めの頃は、迷子になるほど広大な閉架書庫の無数の本棚から、要求された本を探し出すのは一苦勞だった。一冊ならまだしも、何冊にも及ぶと大きなストレスがのしかかる。地上では、まだかまだかと学生が本を待っているのだから、急がなければならないのだ。

同僚達は閉架書庫へ行くのを嫌がったが、本を探すことに慣れてくると、私にはその静けさが心地良く感じられるようになった。地上では煩雑な人間関係の波が渦巻いているというのに、閉架書庫は波風一つ立たない、平和そのものの“深海”のようだったのだ。

いつの間にか私は、休憩時間にその穏やかな深海の中に身を浸すことが習慣になっていた。物言わぬ本の海の中に潜り込むとホッとして、ささくれだった神経も回復してゆく。私は一匹の深海魚と化して、そっと心の傷を癒していたのだった。

時には私同様、気分転換に来ていると思しき職員を見かけることもあったが、相手の邪魔をせぬよう、お互いに気付かぬふりをして、しばしの安らかな休息を享受していた。

だが半年以上が経ち、秋風が吹く頃になるとさすがに仕事に慣れ、職員や学生にも其々の立場で抱えている責任や苦労があることがよくわかり、私は少しでも皆がラクになるような仕事の仕方をしようと思い始めた。

ところがそんな矢先、館内に突如、女性の大声が響き渡った。例の我儘嬢が別の同僚と喧嘩を始めたのだ。離れた所にいた私は慌てて彼女達の元へ飛んで行き、無理やり休憩室に二人を押し込んだ。「周囲の迷惑も考えなきゃ」と説教を施すと何とか彼女達が冷静になったので、私は休憩室にあったハーブティーを入れてカップを二人の前に差し出した。

思わぬ展開が始まったのは、そこからだ。

ハーブティーは苦手だと、そっぽを向く我儘嬢に私は何気なくこう言って勧めた。

「このハーブティーは林檎に似たいい香りがするよ。カモミールっていうハーブなんやけど、心を鎮めてくれるんよ。ヨーロッパでは“お母さんのハーブ”って呼ばれてて、子供が風邪を引いた時にも飲ませて……」

と、そこまで話したところで、彼女の態度が急変した。えっと驚いたような顔で、

「お母さんのハーブ？これがお母さんの味と香りなんですか？」

と聞き返し、彼女はカップを手に取り、鼻に近付け、クンクンと香りを嗅ぎ始めた。

「これがお母さんの香り、お母さんの……」

そう呟きながら、何度も何度も確かめるようにして香りを嗅いでいた。そして、顔を上げると予想だにできなかった話を始めた。

「私、小学校二年の時、両親を一度に自動車事故で亡くしたんです。祖父母に引き取られて可愛がってもらってるけど、祖父母も年を取ってきて、私一人でこれから介護ができるかどうか心配だったんです。家でもこのハーブティーを飲むことにしよう。お母さんが傍についてくれるような気がするから」

彼女はそう言うと、ゴクリと一口、そのお茶を飲んだ。

「わっ、美味しい。実は私、“飲まず嫌い”やったの、へへへ」

恥ずかしそうに頬を赤らめる彼女に、私ともう一人の同僚は驚いて顔を見合わせた。それから私達三人はしばらくの間、泣き笑いをしながらそのお茶を飲んでいた。バラバラだった三人の心が温かく寄り添っていた。このとき初めて私の胸には、彼女達同僚に対して姉のような慈愛の気

持ちが生まれたのだった。

その一件以来、嬉しいことに派遣社員全員の結束が強まった。お互いの諸事情を理解し合い、助け合う気持ちが高まったのだ。

職員との関係も、これまた意外な方面から和やかになっていった。職員と同僚の一人が、なんと婚約したのだ。仕事が終われば肩を並べて帰る二人を皆で冷かしたりして、館内におめでたい雰囲気の流れ、あれよあれよという間に三集団の垣根が消えてスタッフ全員が大きく一つにまとまっていった。

私は学生達とも、就職や恋愛の相談にのったりして仲良くなり、気が付けば休憩時間も閉架書庫に逃避することがなくなっていた。仕事に対する充実感と皆に対する感謝の念が日に日に深まっていき、辞職しないで本当によかった、と心の底から実感していた。

そんなこんなで皆で和気あいあいと楽しく仕事をしているうちに契約終了日が近付き、有難いことに、心配していた次年度の契約は無事、更新がなされたのだった。

今年、私は還暦を迎えた。今はもう仕事はしておらず、読書が好きなので地元の図書館に足しげく通っている。その図書館の大きな閉架書庫も、地下に肅然と存在している。

閉架書庫に収納されている本を司書さんに頼んで持ってきてもらう機会も多々あるが、少しぐらい待たされても、私はかまわない。もし司書さんが新米であったなら、本を探し当てた後、人知れず書庫の中で涙と汗を拭う時間を、ほんの僅かであっても与えてあげたいと思っているからだ。

そして「今はできないことがあっても、何も心配ないで頑張っってね」と、心の中でいつもメールを送っている。未来へと否応なく流れていく月日と様々な経験が、必ず新米を一人前の司書に育ててくれるのだから。時に、ビックリ仰天するような出来事が起こっても、それがまた忘れがたい良き思い出に変わり、人生に鮮やかな彩りを添えてくれる。

最初の頃こそ迷子になって出口がわからず、本を抱えたまま半泣きになっていたけれど、思えばあの閉架書庫は、壊れそうになる私の心を守ってくれた“母なる海”だった。

いつかまたあの母の懐に潜り込むことがあれば、大好きな歴史や古典や心理学の本棚の周りを次から次へとスイスイと、自由自在に泳いでみたい、一匹の魚になって――。

閉架書庫へ降りて行く司書さんの後ろ姿を目で追いながら、そんなことを想う私は、ちよっぴり年かきのいった深海魚になった。

(京都府京都市)

【無断転載を禁ず】